

西川小りん

長谷川時雨

青空文庫

夏の朝、水をたっぷりつかって、ぎぶぎぶと浴衣ゆかたをあらう気軽さ。十月、秋晴れの日に張りものをする、のんびりした心持は、若さと、健康に恵まれた女ばかりが知る、軽い愉快さである。親しいもののために手軽くつくる炊事の楽しさと共に、男や、貴人あなたの知らない心地であろう。

私はあたしときものの興味を、今でも多分にもっている。背筋の上から、ずっと下の針止めに鉾はさみを入れておいて、ツート一筋に糸をぬくのがすぎだ。それは空想好きの私のよるこんで引きうけた、娘時代の仕事のひとつであった習慣からでもあるだろう。ときものの糸と共に、つきない空想を、とりとめもなく手ぐりただし楽しんでいたのである。だが、その習慣がまた、ずっと昔の、あんぽたん時代の家庭行事の一つに、夜ごと養われていたのでもある。奥蔵前の、大長火鉢をかこみ、お夜食のすんだ行燈あんどんの許もとの集りは、八十八で死ぬ日まで祖母が中心だった。ある年は、行燈の影絵を写してよるこんだ私だった。ある年は、小切れをもらってお手玉をつくる小豆あずきを、お盆の上で選よっていた。ある年はお手習いしていた。またある年は、燈心を丸めて、紙で包んだ鞠まりを、色系で麻の葉や三升みまにかがっていた。ある年は、妹たちときしやごをはじき、ある年はくさ草紙を見ていた。母はつきものをす

る時もある、歌舞伎（芝居雑誌、二六通や水魚連すいぎよれんという連中から贈ってきた）の似顔絵を見ている事もあるが、かき餅もちを焼いたり蕎麦そばがきをこしらえてくれたりした。女中たちは雑巾ぞうきんをさしたり、自分のじゅばんの筒袖をぬったりした。

思えば、そういう時に、祖母は修身談をきかせたのであった。だが、それが、どんなに面白かつたらう。後にきく種さまざま々な修身談は、はじめから偉そうに、吃々きつきつと、味の無い型にはまりきつたことをいうのばかりだ。それは、語るものが、自ら教えるという賢人面づらまたは博識ものしり顔をするからだ。そして、いう事が非凡人のことばかりだからだ。

ところが、祖母おばあさんは面白い凡人なのだ。この祖母、前にも言ったかも知れないが字を知らない。きくところによると無学文盲もんもつとは、落語家はなしかなどにいわせると馬鹿の代名詞だが、決してそうでないので、ただ、学をまなばず、字に暗しであるので、文盲とは、文字だけに盲目めくらであるというのだ。この祖母はまさにそれを証拠だてている。心の眼は甚だ明らかであるのに、文字だけが見えないのだ。気の勝った人だったから、あるいは文字をよく空んじていたら、おそらくあんぽんたんの祖母ではなかったらう。

だが、この祖母、一市井人しせいじんとして、八十八の老婆で死んだのだが、手習師匠へもつてゆく、お彼岸の牡丹餅ぼたんもちをお墓場はかへ埋めてしまったのから運命が定まったのだといえ、人

間の一生なんて実に変なものだ。とはいえ環境が人をつくるといいうが、祖母自身も、好學心がなかつたのだともいえる。しかし、徳川文明の爛熟らんじゅくの結果、でかたんになった文化の昔、伊勢のお百姓の娘にそれをのぞむのは無理であろう。

——大庄家の娘小りんの、美目みめのすぐれていたことも、領主藤堂家に腰元づとめをしていた花の十八、疱痘ほうそうになつて、許婚いいなづけの男に断わられようとしたのを、自分の方から先手をうつて断わつたのは幾章か前に書いた。江戸の兄をたよつて江戸で暮し、東京で死んだ六十九年、彼女は三十三に私の父を抱いて、通し駕籠かごで故郷を訪れたきり二度とゆかない。

子供を理解しない親——それはこの現代にもさらにありすぎる。男性おとこの的氣象をもつたものにも赤い襟をかけ、島田鬘まげに結わせ、箱入りの人形のように玩器物おもちゃとして造りあげようとする一方、白粉おしろいをつけて、しなしなしたがるような女性おんなのようなおとこのこ的稟質男子りやうしゆんを、鉄砲をかつがせたり調練をさせたりして、此子これはなんでも陸軍大将にすると力んでいるのもある。

小りんさんは男性おとこの的だつた。手習いがいやなのではなく、寺院おてらの夫人だいきさんが、針はりばかりもたせようとするのが嫌だつたのだ。もつとも、近松ちかまつや西鶴さいかくの生なまていた時代に遠くなく、もつとも義太夫ぎだう節ぶしの膾炙かいしやしていた京阪けいはん地方である。女子おんなごに文字を教えると艶いろづ

文ばかり書くと、文字を教えたがらなかつたという土地がら、文盲をつくるのに骨を折つたのであろう。

彼女はお寺の墓地で、竹の棒をもつて男おとこ童たちと遊びくらしした。お彼岸の蒔絵まきえの重箱の中にはお寺さんへもつてゆくお萩餅はぎが沢山はいつている。寺の門近くくると、重箱をもつて来た下男を帰してしまつて、遊び友達の一日の食料をもっている事に満足した。犬ぬたで蓼の赤い花の上に座つてお萩をたべる子供たちの、にこやかな頭の上には高い空があつた。文化の昔の女団長の頭の、やつと結わえた蝶々ちようちようまげ鬘には、赤トンボがとまつている。

「もつと食べよ。」

「もうこんなにお腹なか大きくなつてしまつた。」

あぶらやさんをかけた男の子が胸をのしてみせる。あんこのついた指をしゃぶるものもある。鼻の頭へ黄豆粉きなこをつけているものもある。上唇についた黒くろごまと鼻汁はなとを一緒になめているものもある。

そこで困つた事は、残つたお萩の始末で、食べ残しをお寺へもつてゆけない。

「投げちやえばいい。有難うございましたって、からっぽにしてゆけばいい。」

小りんさんはそうしなかつた。穴を掘つて重箱ごと捨ててしまつた。

家へかえつて訊かれると、「捨てたよ」とはつきり自分でした通りをいった。家のものがいつて見ると、黒ぬり蒔絵の重箱が、残ったお萩のはいつたまま土中であつたので、かえつて本当だつたのに呆れた。

女らしくないといつて、糺命のため味噌蔵にいれられた小りんちゃん、大人たちの不当な仕置きに腹を立てた。あやまることなんぞ考えもしなかつた。自分のしたこと、いいかわるいかは子供だから知らないが、つねづね親たち師匠から、人間は正直が第一だ、ことに神宮の御鎮座ある伊勢は「伊勢子正直」と名のあるのを誇りにしているといましめるのに、なぜ正直に言つたことが悪い——それが不足だつた。

彼女は、自分をこんなに困らせる家人を、自分も困らしてやろうとばかり考えた。暗い陽の遠い味噌蔵に這つている、青大将も怖くなければ、いたずらに出てくる鼠にも馴れた。仕かえしは味噌樽の中へときまつた。彼女は自家用の幾個かの樽のなかへおしつこが出たくなると、穴をあけておいてした。味噌を掻廻しておいて知らん顔をして、それからおわびをして蔵から出してもらつた。

おや？ この樽の味噌は——あら？ この樽のも——

やがて、日がたつてから、家のものが変な顔をして、味噌汁を吸うのを、彼女は小躍り

してよろこんだ。

「私のしつこを飲んでいる——」

大人たちは、はじめは何をいつているのかとりあわなかつたが、彼女があんまり伊勢子は正直だ、伊勢子は正直だ、私のしつこを飲んで——と小躍りするので、やっと彼女の悪戯いたずらが、味噌をだいなしにしてしまったのだと感じた。

この祖母おばあさん、江戸へ来て嫁入つて、すぐ大火事にあつて、救米のおむすびをもらった時、傍そばにいた者がお腹がすきすぎて、とうてい一個の握飯ひとつ おむすびでは辛棒がなりかねるとなげくと、さつそくに抱えていた風呂敷包に手拭をかむせ、袖の下に寝させたかたちにして、

「お役人様、ここにも一人おります。」

と、まんまと一人分握飯をせしめた。花婿だった祖おじいさん父おむすびびつくりして、

「お前はおそろしい女だ」

と嘆息したそうだ。昔の町人の考えでは、大胆でも、機智があつても、女らしくない女としたものに見える。メソメソ、グズグズ、ブツブツ、ウジウジしているのが女らしい女としたのであろう。女の人のすべてが低下したのは（祖父をわるくいつてはすまないが）、こういう男に、扶養されなければならぬ位置に長く長くおかれたからであらう。そして

そういう善人といつていいか、グズ男といつていいか、ともかくそんな男どもの好みにあつた女をつくり、その女が、そういう男の子を生んできたのだと思うと、家うちの子はどうしてこう低能なんだ、なぞと、学校の試験や親の思う通りにならなかつた場合に、そんな勝手なことはいえないはずだ。

祖おばあさん母、ある日、

「古道具屋で御おほち櫃を決して買つてはいけない。」

と変な教訓を垂れた。聴いていた壮士荻野六郎が、赤黒い、ズングリ肥ふとつた腕なでを撫上げながらへえと腑ふにおちない声で返事をした。

「飯めしびつ櫃だけ古道具屋で買つてはいけないのですか。」

「お前が出世前だからいうのだよ。」

毬いぐり栗のような男は大いによろこばされた。

「僕が出世前だからでしょう、御教訓によつて米こめびつ櫃も買いません。」

「馬鹿なことは言いなさんな。お前の身分で、古道具屋からでも米櫃が買えればたいしたものではないか、米櫃というものは、入れておける米が買いおけるから入用なので、買っておきの出来ない米なら米櫃は入りはしない。古道具屋のでも結構だから、入れるだけの米

が買えるようになったら米櫃もお買いなさい。」

「へえ？ どうもそれは、ちと腑におちませんが——」

彼女の嫁女がそばから吹出していった。

「それはね、家で売った飯櫃が、廻り廻って、何処で売ってるかわからないので、気にしてらっしゃるのですよ。」

壮士荻野六郎にはなおさら話がわからなくなった。すると、彼女の息子も笑って言った。
「俺の失敗でね、おつかさん、子供の時の味噌樽式をやったのだよ。」

こんどは荻野六郎にもほぼ解った。彼も吹出したい気持ちで話を誘った。

「俺が酒に酔って帰って来ると、ツベコベいやがって面倒くさいから、蔵中へ叩きこんで大戸を閉めちやったら、阿母まで締めこんでしまつて——」

父はそれがくせの、左の手でやぞうをきめて、新進的代言人らしくもなく、ならずもののような巻舌で言った。

「祖母さんが厠へゆきたくなつたとお言いだから、開けてもらいましようというど、なに頼みなんぞおしなさんな、先方から悪かったと開けにくるまで投つたらかしておおき、干乾しにすれば親殺しになるから、だまつても明日の朝は開けにくるよつて——」

荻野六郎は、それで飯櫃おほちへやったのだなど、フ、とも、ウともつかないフウーという笑わらいをうなつた。用心のいい祖母は、他家へ火事見舞に、握飯おむすびごとに入れておくる新しい大きな飯櫃をつくらせておくのだった。それが、蔵の三階の棚にあるのを、勝手を知つた彼はよく知っていた。

「だが、売つたのはしどいな。」

そうはいつたが、彼もそのほかの所置しよちはおもいつかなかつた。

「なるほど、孫子の代まで、古道具屋の新らしい飯櫃は買うなど申しつけます。」

彼は笑い笑い頭をさげた。

世の中の物騒な時分、祖父おじいさん母夫婦は奥蔵の二階に寝ていた。ある夜押込みがはいつて、祖父おじいさんの頬つぺたを白刃しらばで叩たたいて起した。祖母は小さな声でみんな出してやれといった。祖父は階下したにおいて金函かねぼこの前にすわつたが、手が顫ふるえて手燭てしよくへなかなか火がつかかなかつた。

祖母はその間に厠はばかりへゆくふりをして、すっかり家うちじゆう中ちゆうを見てきた。外に見張みはりが一人いるのが蔵の二階の窓から月の光りで見えた。祖母がすっかりすましてきても、金箱の鍵かぎが

あかないで、祖父は盗人におどしつけられていた。

だが、祖父は祖母を信頼している。早く出してやれといったが——祖父は頭の上の、階下から荷物をあげおろしするためにつくつてある簾の子に、階下の様子を覗いている祖母の眼を感じた。一枚一枚丁寧に小判を出してやっていたが、そのうちに盗人の方が焦燥つてきて早くしろといった。

昔の金は重い。盗人が一足外へ出たと同時に、奥蔵の二階の窓から、激しく、せわしく「火事だ火事だ」と金盥を叩きたてた。それに応じて店でも騒ぎだした。火事早い江戸だから間髪を入れず近所の表戸が開く、人が飛出す——

盗人も火事だ火事だと怒鳴つて逃げようとしたが、火元の方から逃出すものはない、取りかこんでくる人たちに、ものしたものを投げつけて逃げていった。

その祖母が女のたしなみを、いかにも簡明に女中たちにも、子供たちにも共通にはなしてきかせるのだ。その中で、あんぼんさんの耳に残っているのは、祖父が蔵を建てようといった時に一戸前の金が出来たからと悦んでいったのを、

「も一戸前分の金が出来てからになさい。」

と祖母はいった。自分たちの働きの成績を、一日も早く、黒塗りの土蔵にして眺めたいと

願っていた祖父は、明らかによろこばなかった。

二戸前分の金が集まった時に、祖母はまたいった。
ふたとまへ

「も一戸前分出来たらにしましょう。」

さすが温順な祖父も、なぜだと訳をきかないうちは承知しなかった。

「ものは、思っていたより倍かかるものです。まして、長く残そうと思う土蔵を、金がかかりすぎるからといって、途中で手をぬくようなことがあるといけないから、どうしても二ツ建てるだけの用意をしておかないとちゃんとしたものが出来ませんまい。」

それは理由のある理窟だから、祖父は頷いた。けれど、三戸前分なければというのには不服だった。

「それがなぜ、もう一ツ分入るのだ。」

「では、万一、蔵の出来かかった時に天災が来たらどうします。土蔵は出来ましたが、蔵に入れる何にもなくって人手に渡しますとは、まさか言えますまい。」

なるほどと思つた祖父はうなつた。現今のように金融機関のそなわらない時代のことである。空手で、他人の助力をかりずに働かなければならないものには、それほど手固い用意も必用だったであろうが、その場合の祖母の意見は、もうここまで来たという祖父の

気のゆるみを、見通していたものと私は考える。

私という人間は、また、そうした祖母の教訓をうけながら、利にうとく、空手でものごとをはじめ、赤ん坊のような勇氣？ 時折自ら苦笑する、『女人芸術』にしてからが、この祖母の論めいましを服用していたならば、秋風寒しなんて、しなびはしないであろうに——祖母は十九で自己を建設のために遠く出て来た人、私は時代の激しい潮流に押流された江戸人の、残物の、アブクのようなものをうけて生れて来て、文学をよく知らずに、文学でお金をもらうことを覚えた不覚者、その相違である。だが、服用していることもある。

「芝居などにゆくのは三度を一度にして、そのかわりものを惜むな。」

芝居——それより娯楽をしらなかつた昔の女は、芝居と叫ぶが、それは旅行にも、その他のこともおなじである。これは、当今の、いかに安価に、いかに手軽にというのと、違いすぎる言いかただが、私はいい教えだと思っている。チビチビ、ケチケチ、ならしにしてなまけているのはいけない。自分ばかり愛すと物惜みにもなる。私の母はよくつぶやいた。

「あのやかましい祖母おばあさんに、十八年も仕えるなんて、なまやさしい辛棒じゃない。」
けれど、また静かに祖母の長い間の教えを思出すと、

「だけれど、あの方にやかましく言われなければ、私なんぞは、それこそなんにも分らな

かつたろう。」

それはたしかにそうで御座いまいしょうと私は言う。あの木魚のおじいさん（前出）と、そのおかみさん（前出）の子で、十三、四に、お前まえ浜はま一帯、お旗本、士族といわず、漁師までびつくりさせた勇敢な汐汲しおくみ少女（前出）のおたきさんである。むちやくちやな勇氣と働きは、愛されもしたであろうが、辛棒は、祖母の方が多くしたかもしれない。

祖母のお友達は變つていた。御隠居さんにちよいとお願いがと、やってくるものは、家へくる客とは違つて、木綿ものを着て、大層遠慮がちに訪ずれた。だが、
「まあよくお出いでだ。」

と祖母が元氣よく玄關に現われると、彼女たちは雄弁になつて奥へ通る。

あんぽんたんは夜泣きをして、父母の室へやから襖ふすまの外ほうへ投りだされて、寒い室に丸くなつて泣寝入りして、祖母に抱いていかれた夜から、ちゃんと心得てしまつて、泣いて室外へ投りだされると、蔵の網戸のとこまで、そつと這はつてゆくことを覚えた。すこし大きくなつてから、夜半よなかに祖母におこされて、お灸きゆうを毎夜すえてあげる役目をもつた。高齡の人に、心のおけないお伽坊主とぎですこしは慰めにもなつたのであろう、何処どこへゆくにもお供ともをさせられるのだつた。

夕御飯ゆうごはんがすむと、お気に入りの松さんの車で、ソロソロと、牢屋ろうやの原はらの弘法大師こうぼうさまへ祖母は参詣さんぎにゆく。ある時は毎晩のように出かける。あんぽんたんと女中とは、ブラ提ちようち灯らんをさげて車のわきを歩いてゆく。送りこむと松さんと女中は帰っていった。

大安楽寺だんあんがくさまの門前までゆくと、文字焼もんじやきやおぼさんと、ほおずきやの媪おばさんが声をかける。下足のお爺さんは、待つていたように援たすけおろしてくれる。本堂にはお説経の壇だんが出来て、赤地錦あかじにしきのきれが燦爛さんらんとしている。広い場処ばしに、定連じょうれんの人たちがちらほらいて、低い声で説経せきぎょうしていた。

祖母は広い廊下を通つて、おさい銭函せんぼんの横の一角の、参詣人さんぎにんが「お蠟燭ろうそく」と階下から怒鳴ると、おーと返事をする坊さんたちの溜りたまの方へいった。そこには大きな角火鉢かくかひちや、大きな罐子かんすがあつて世話人や、顔の売れた信者の、団欒だんらんする場処ばしだつた。

時々高野山たかのさんから説教師が派出しゅつしんされてきた。その坊さんが若くて、学僧らしい顔付きをしていると人気があつた。お婆さんたちがはしゃいだ声を出して御寄附ごぎふの相談をする。麦酒ビールなら水だから召上るだろうとか、白足袋を差上げようとか、禪ぜんにおこまりだろうとか——すると、番僧が大火鉢たいかひちで、肘ひじまで赤いたこをこしらえて、ガンばつてあたりながら、拙僧せつそうにもくれよとか、雑巾ぞうきんの寄附ぎふがすけなくなつたのという。食物をつけとどける人も少く

ない、毎晩くる中にも、お茶菓子をかかさずもってくるので、火鉢の辺りは有^{ゆう}福^{ふく}だった。大^{おお}店^{だな}の内^{うち}儀^ぎさんたちは嫁をそしる。中年になつたお嫁さんは、いつまでも姑^{しゅうとめ}が意地わるく生きていると悪^{あつこ}口^{くち}しあうのを、番僧たちはうまく口を合せていた。そんな時、祖母は口を決してださなかつた。傍^{はた}のものが、あんぽんたんの顔をみいみい、円^{えんぎよく}曲^まに、母のことに話をむけてゆくと、

「心の鬼^つの角^つをおりに来て、ざんげなさるのはよいが、後^ご生^{しょう}がようござりますまい。家の嫁は孝行で、孝行であんなよいものはござりませぬ。」

とやるので、合^あ手^ては苦い顔をしてだまつてしまう。私はそこにも厭^あきて、錫^{すず}の大^つ壺^ぼに酌^くみいれてあるお水をもらつて、飲^のんだり、眼につけていたりする人を眺^{なが}めていた。

やがて和^わ讃^{ざん}がはじまる。叩^か鉦^ねの音^ねが揃^{そろ}つて、声自慢の男女が集ると、

有^う転^{てん}輪^{りん}廻^ねの車^{くるま}より、

三^{さん}毒^{どく}五^ご慾^{よく}の糸^{いと}をだし

生^{しょう}死^じのかせわのひまいらぬ

さあてもとうとき、おんあぼきや、

べいろしやの、なかもふだらに、はんどく、

じんばら、はらはりたや、うん——

じんばら、はらはりたや、うんが面白くて、いい気になって高音こうおんにうたった。

そのうちに、香染こうぞめの衣を着た、青白い顔の、人気のあつた坊さんが静々と奥院の方から仄ほのかにゆらぎだして来て、衆生しゅじょうには背中を見せ、本尊菩薩ほんぞんぼさつに跪座立礼きざりつれい三拝して、説経壇の上に登ると、先刻嫁を罵り、姑をこきおろした女たちひとが、殊勝らしく、なんまいだなんまいだと数珠じゆずを繰っておがむ。

お坊さんは、壇上の独鈷とっこをとつて押頂おしいただき、長い線香を一本たて、捻香ねんこうをねんじ、五種の抹香を長い柄えのついた、真ちゅうの香炉こうろにくやらす。そして徐ろおもむに、衣の袖を搔かきあわせ、瞑目合掌めいもくの後、しずかに水晶の数珠をすりあげ、呟つぶやくようにひくく、

ぢん未來みらいさい——

歸依仏

歸依法経——

とかなんとか、涼しい、低くよく通る声で、だんだんに皆をひっぱってゆく。

祖母は、有難い御僧おんそうに、禪したの布施おびをする時は、高僧から下足のおじいさんにまで、おなじように二締ふたしめずつやった。祖母は別段、和讃歌もお経も覚えようとしなかった。松さ

んがその事を帰りに訊いたら、

「空念仏だ。」

といった。では、なぜ毎晩参詣なさいますといったら、こう答えた。

「老人は家もすこしはあけてやるものだよ。」

門前の汁粉屋は、人の帰り足をきくと、毎晩かかさず立寄る祖母と、その仲間のために、おしるこを熱くし、おぞう煮もつくっておいた。もんじやきやのお婆さん、ほおずきやのおかみさん下足のおじいさんといった仲間が、そのほかにも三、四人はきつとくる。そして車夫の松さんと、迎えにくる女中と、あんぼんと、それだけが、あまり上等でないおしるこを振舞ってもらう。

あたしは「長吉」という、まつ黒な古人形を持つている。長吉はねずみちりめん無垢の上衣、緋ぢりめん無垢の下着、白の浜縮緬のゆまき、緋鹿の子のじゅばんを着ている。それらは古びきつているが、祖母が江戸へ来てから新らしく縫って着せたものだ、祖母はその長吉人形を抱いて十九の年に下向したのだ。

なんで江戸まで出てきたのかというと、疱瘡を病らつているとき、あんまり許嫁

の息子とその母親が、顔を気にして見舞いに来るので、ある日、赤木綿の着物に、赤木綿の手拭で鉢まきをし熱にうかされたふりをして、紅提灯をさげて踊り出し気の弱い許嫁母子を脅かして、自分の方から愛想ずかしをさき廻りにしてしまった。こんなところは面白くないと、江戸の兄をたよつて出て来たのだった。小りんという名も、よい容貌も瘡瘡でお安くなったというのと、屋 寿 と祝つて、祖父と家をもつときに取りかえたのだ。祖父は九歳の年に、他の子供たちと一緒に、長い年期中大丸呉服店へ小僧奉公に下つたのだ。父親はもう亡なつていた。足弱は三人ずつ、三方荒神という乗りかたで小荷駄馬へ乗せられて来たのだ。子供の旅立ちを見送りに来た親たちに、顔を見せると、すぐに桐油布を被せてしまつて、子供たちに里心を起させないようにしたという、みじめさだ。父親に早く別れなければ、祖父もそんな辛棒が出来たかどうか、祖父の母も手離しはしなかつたであろう。彼女はそのまま、九ツで江戸へよこした息子に逢わないで死んだのだ。その女は、あきらめきつた悲しい手紙を息子へよこしている。

残暑つよくおはし候へども、いよいよ御無事にお勤めなされ候や嬉しくさつしまゐらせ候。私も五月末つかたより病氣にて、大きにこまり入申候、なれども、二、三日づつはよひ日もあり、またまたあしきこともおほく御座候へども、当月に相成り、いつ

かう少々もたへまなく打ふし居申候。命の限りはわかり不申候へども、まづ今の病氣の様子にては、あまり長いきも出来不申と心得、もはや、ていはつ（剃髪）いたし、なむあみだ仏のみ心がけふして居申候。しかしながら、このたびは榮吉が至つていねいに世話してくれ候ゆへ、何も不自由もなし、誠に嬉しく仕合に存候。

こんな手紙を見た、年期中の親孝行な忤せがれはどんな心持ちであつたろう。そうした習慣ならわしが、祖父を辛棒つよい、模範的な町人にしてしまったのであろう。祖父の母は歌人うたよみで、千町ちまちといつたというのだが、千町とは聴きあやまりであつたのか、千蔭ちかげの門人にその名はないという。祖父も手跡はよく、近所の町の祭礼の大おおのぼり幟しほなど頼まれて書いた。

そうした優しい男と、生れた時に祝つてもらつた、京人形長吉を抱いて、振袖で、通し駕籠かごで江戸まできて、生涯に一度、また通し駕籠で郷里を訪れただけの祖母との新世帯しよたいは、それでも琴瑟きんしつ相和したものと見えて、長吉のしめている帯は、祖父が仕立て、時の將軍様のもちいた錦にしきのきれはじであり、腰にさげている猩々しやうじやう緋ひの巾着ちやくは、おなじく將軍火事頭ずきん巾の残り裂れだという。その時の將軍は十一代徳川家いえなり斉なりであろう。奢侈しやしを極めた子福者、子女数十人、娘を大名へ嫁かさした御守殿ごしゆでんばかりもたいした数だという。後に大御所とよばれ、徳川幕府をひへいさせた近因だともよばれたほど、派手な時世だった。

アンポンタンはこの祖父おじいさんの歿後ぼつご、母が嫁して来たので、生きていた日は知らないが、善良な小市民の見本であつたらしい。長い間には、気がさな細君に、どんなにハラハラさせられたかしのれないであろう。水野越前えちぜんの勤儉御趣意きんけんごしゆいのときも、鼈甲べつこうの笄かんざしをさして、外出するときは白紙かみを巻いて平気で歩いたが、連合つれあい卯兵衛が代つてお咎めとがをうけたのだ。

小りんさんが卯兵衛旦那だんなの、浮氣の穴を探しだしたゆきさつは面白い。初春のことで、かねて此邸このうちだと思ふ、武家の後家ごけの住居をつきとめると、流していた一文獅子じしを引っぱつてきて、賑わしく窓下で、あるつかぎりの芸当をさせ、自分は離れた向う角にいた。近所からあつまつた見物や子供たちはよろこんで騒ぐので、思わず卯兵衛さんが顔を出し、目的の女も顔を見せた。そこで騒ぐのでも訪れるのでもなく、小りん女房はニツコリと帰つて来てしまうという手だ。卯兵衛さんの閉口したことはいうまでもなからう。

二人の間に二人の男の子があつて、上は（前出テンコツサン）出走人となつてしまった。わたしの父はいたずらツ子で、お母さんを困らせようとして、叱られたときに、大事にしていた長吉人形の前髪と、奴やつこさんと、ジジツ毛を、鋏はさみではさんでしまった。大きくなつてからも、両親が蔵の縁の下に、金を埋てあるのを、いつの間にか虎太郎五十両拝借と書い

た、附木つけぎ一枚を手形がわりにして持つていったりしたことを、風通しのよい、青い林檎りんごの実つたのが目のさきにある奥二階の明り窓のきわで、小粒こつぶや二朱金にしゆきんを金かなだら盥らいで洗ったり、糠袋ぬかのような小さい麻の袋に入れかえるとき、そばにかしこまっているアンポンタンに、

「いたずらもせぬような男の子はだめだ。」

というふうなことを言った。町ではのれんをはずす忙しい夕暮れかた、棲つまをとつて、小路の角に祖母は時折たたま佇すんで、どこともなく眺めていた。祖母の箆たんすの引出しには、そっくり手のつかない、男ものの衣服が、したおびまで揃えてしまつてあるのを、誰も気がつかないふりをするのだつた。自分の死後の白小袖もちやんと羽二重でつくつてある人だつた。見すばらしくしてかえる年老いた息こを心に描いていたものと見える。そんな時、あわれげな人が通ると、懐に入れて出た小金を、みんな、その人の掌にあけてやつてしまふのだつた。

悴せがれ虎太郎はあたしの父の若いおりの名で、祖母が老てからは実によく孝養した。

小りんさんは檀家だんかが頭しらなので、お寺へゆくと、和尚たちが心置きなく、

「御隠居さんはこの位までかな。」

と畳へ米よねという字を書くと、坊主は金がほしくなったので、ひとの葬式を待っていると笑ったが、八十八歳の三月、明治天皇銀婚の御祝いに、養老金を頂いて、感激して、みんなにお赤飯をふるまい、ずらりと並べて箸はしをとらせ、見ていて死ぬともしらずに死んでいった。

青空文庫情報

底本：「旧聞日本橋」岩波文庫、岩波書店

1983（昭和58）年8月16日第1刷発行

2000（平成12）年8月17日第6刷発行

底本の親本：「旧聞日本橋」岡倉書房

1935（昭和10）年刊行

入力：門田裕志

校正：松永正敏

2003年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

西川小りん

長谷川時雨

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>